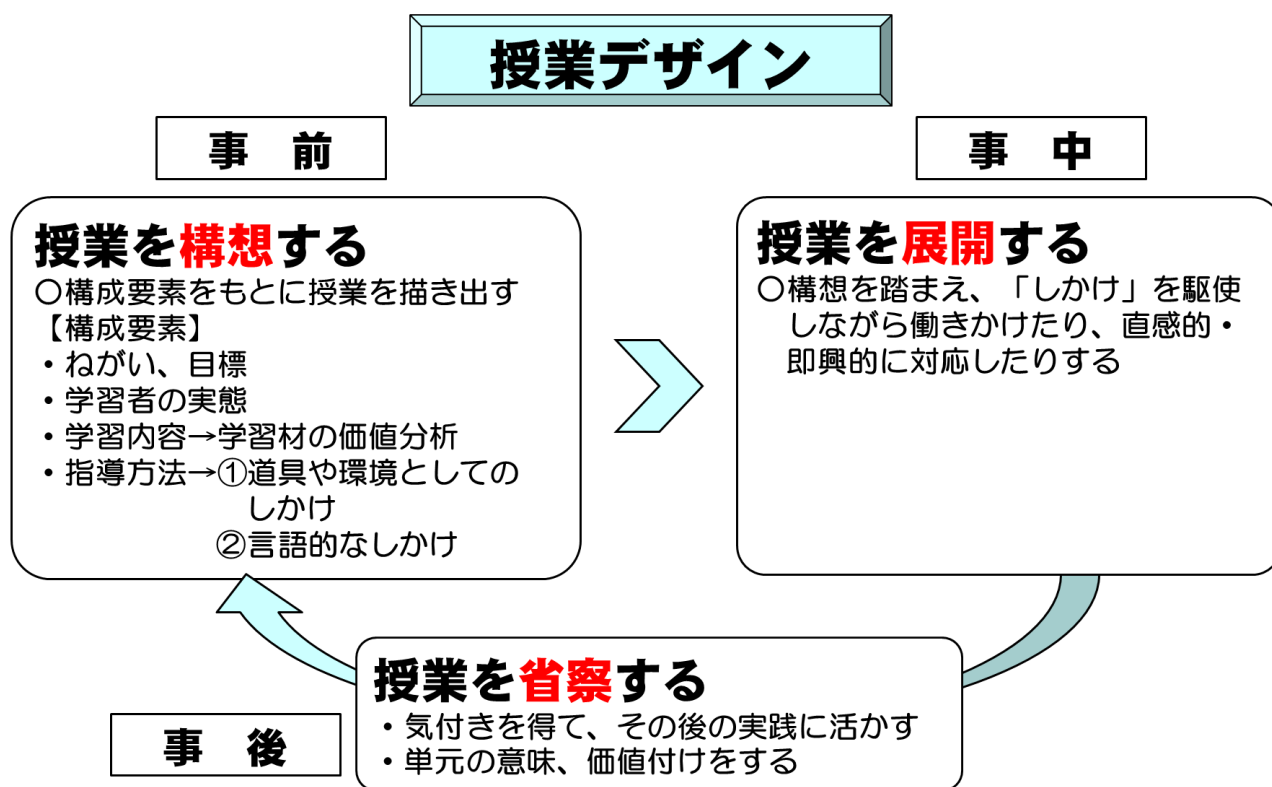


学校教育目標 **自 律**

研究主題

自律した学習者が育つ授業デザイン (2年次)



鹿毛雅治「授業という営み 子どもとともに『主体的に学ぶ場』を創る」(2019、p.2を基に作成)

令和8年度 本校の実践・研究について

研究主題

【3年計画】

自律した学習者が育つ授業デザイン

(2年次)

I 研究主題設定の理由

1 「自律」の伝統を踏まえて

本校では、1874（明治7）年の創立以来「自律」を学校教育目標に掲げ、教育活動に取り組んできた。令和に改元した現在も「自律した学び手が育つ」という目標実現に向けて、本校教育不易の貴重な財産を継承しつつ、更なる新たな実践知があることを信じ、その実証に励む使命を担っている。

下表は、40年ほど遡った本校研究主題である。この年月における「自立」から「自律」への変遷は、自主的・自発的な学びの姿に加え、学び方を学ぶ過程に重きを置く方向性へとシフトされてきた現れでもあろう。現行の学習指導要領でも、「予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのか」という目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすること」が重要であり、自ら学ぶ力が「生きる力」として捉え直されている。「生きる力」を育むために、学校教育がその強みを発揮することが必要であるとされている。

年 度	研 究 主 題
1979～1981	自立する子ども・創造する学校ー生きてはたらく力を育てる指導ー
1982～1984	充実感を創る授業の研究
1985～1987	生き生きした個の実現をめざしてー自己教育力を育てる指導ー
1988～1990	自ら可能性をひらいていく子どもを育成するために
1991～1992	自ら可能性をひらいていく子どもを育成するために
	ー自己評価能力を高める指導ー
1993	自ら可能性をひらいていく子どもを育成するために
	ー子どもの効力感が高まる指導ー
1994	豊かな子ども文化をひらく学校ー子どもが有用感をもつ学習ー
1995～1997	豊かな子ども文化をひらく学校
	ー子どもが有用感を持つ単元の開発ー
1998～1999	豊かな子ども文化をひらく学校
	ー子どもが有用感を持つ教育課程の開発と実践ー
2000～2002	確かな力で編み上げる豊かな学びーともにつくる動的な教育課程ー
2003～2005	表現活動を軸にした「学びのふるさと」づくり
2006～2008	感性を高め、豊かな人間性を育む学校
	ー創造的に人とかかわる力を高める授業づくりー
2009～2011	かかわり合いが育む豊かな学び
2012～2014	仲間と共につくる豊かな学び
	ー「対話」を通して思考を深める授業づくりー
2015～2017	仲間と共につくる豊かな学びⅡ
	ー新たな価値を創造する「対話」を目指してー
2018～2021	自律した学習者を育てるー学びをつなぎ資質・能力を高めるー
2022～2024	自律した学習者を育てるⅡ
	ー子どもと教師でつくる「学びのものさし」ー

2 前研究の成果と課題を踏まえて

～問題解決に没頭し、自律的に学ぶ場面を広げる必要性～

前研究「自律した学習者を育てるⅡー子どもと教師でつくる『学びのものさし』ー」の3年間の取組の成果と課題を総括する。

「学びのものさし」とは

本校では「学びのものさし」を、学習者が自らの学習状況の到達度や達成度を見定める規準であると捉えた。自らの学習活動や思考・判断・表現を省察するために単元・題材の中で何度も使い、学びを深めていくために働かせるものである。

また、「学びのものさし」は、これからの学びの方向性を見だし自ら学びを進めるための指針でもある。「学びのものさし」を働かせることで、自らの学びを調整しながら各教科等の本質に迫っていく姿につながっていく。自らの学びを調整しながら各教科等の本質に迫っていく姿が自律した学習者であるならば、その舵取りをするための指針となるものが「学びのものさし」である。

特に1年次の実践・研究を進める中で協議を重ね、「学びのものさし」を構成する要素を次のように整理した。「学びのものさし」は、教科内容と教材内容の二つの視点で構成され、教科内容は見方・考え方と学習方略の要素に分けられる。そのため、「学びのものさし」には、次の三つの要素が含まれる。一つ目が各教科等の単元・題材に合わせて具体化・焦点化した見方・考え方の要素である。二つ目が、認知方略や学習行動、学習環境といった学習方略の要素である。三つ目が単元・題材で身に付ける資質・能力である教材内容の要素である。三つの要素のいずれか、もしくは全てが更新することで、深い学びが実現する。

「学びのものさし」の要素	
教科内容 ①見方・考え方 各教科等の単元・題材に合わせて 具体化・焦点化したもの ②学習方略 認知方略・学習行動・学習環境	5年家庭科 クッキングははじめの一歩～ゆでマスターへの道～ 「学びのものさし」 教科内容 ①見方・考え方：調理の仕方と食品の様子 ②学習方略：食品の調理と食べ比べる活動 教材内容 ③調理の仕方の違いによる食品の変化に気付く
教材内容 ③単元・題材で身に付ける資質・能力	

(1) 研究1年次

重点 子どもの中に、自己の学びを見つめる「ものさし」を生み出す手立て

成果

①自己の学びを見つめ直す規準の自覚を促す支援

- 1) 困ったことや捉えが揺らいだことを表出する場面を設定したことにより、活動の目的意識を高める姿が見られた。
- 2) 「仲間との対話」を通して、共通点や相違点、多角的な視点による考察を踏まえ、自分の解釈を説明する活動を設定したことにより、物事を捉えるための新たな視点を獲得する姿が見られた。
- 3) 目標に照らした到達度や達成度の根拠を具体化するしかけをしたことにより、自分の学びを分析的に見つめる姿が見られた。
- 4) 仲間をモデルとしたり、フィードバックを得たりする場を設定したことにより、必然性をもって自分の学びを見つめ直す姿が見られた。

②見通しをもちながらよりよく問題解決する活動を位置付けた学習過程

- 1) 教科等の原理原則を用いながら最適解を追究する活動の設定したことにより、見通しをもちながら最適解を追究していく姿が見られた。
- 2) 「選ぶ→試す→修正する」活動を複数回設定したことにより、よりよい問題解決のために思考し直す姿が見られた。

課題

協働的な学びで生み出した「学びのもののさし」を基に、自ら学びを深めていくための手立て

(2) 研究 2 年次

重点 「学びのもののさし」を更新するための手立て

成果

①自分事として問題解決に向かう姿を引き出す支援

- 1) 問題解決に向けて、一人一人の興味・関心に応じて、選択・決定できる活動を設定したことにより、自らの興味・関心に応じて、教材や素材、立場、表現方法などを選択・決定し、問題解決を自分事として追究する姿が見られた。
- 2) 思考や表現など自分にとっての学びのモデルの発見につながる場づくりを工夫したことにより、モデルの思考や表現のよさを取り入れ、自ら学びの質を高める姿が見られた。

②必然性を伴った学びの見つめ直しを促す支援

- 1) 思考ツールや動画を用いて思考や表現を可視化し、比較につなげたことにより、一度立ち止まって自らの学びを見つめ直し、思考を深めたり表現を豊かにしたりする姿が見られた。
- 2) 協働的な省察が生まれるしかけとして、日常生活の事象を教科等の視点から捉え問題解決する活動やゲーミフィケーションを取り入れた活動を設定したことにより、自発的に自らの発見や考えを仲間に伝えたり、必要感をもって仲間と情報共有し、問題解決したりする姿が見られた。

課題

一人一人がよりよい問題解決に向けて学び進めるための授業デザイン

(3) 研究 3 年次【最終年次】

重点 「学びのもののさし」を働かせる学びのデザイン

成果

①熱意をもってよりよい問題解決に取り組む姿を引き出すしかけ

- 1) 一人一人が自らの経験や興味・関心、学びやすさに応じて、選択・決定できる活動を設定したことにより、問題解決に没頭する姿が見られた。例えば、次のような姿である。
 - ・【国語科】読み取っていく教材文や書き進めていく文種など、学び進めるための道筋を選び、解釈や表現を交流することを通して、必然性をもって自らの学びに立ち返り、自分の解釈や表現を捉え直す姿。
 - ・【社会科】自ら立てた問いの解決のために選んだ観点や資料を基に、食糧問題や地域の歴史的事象について自分なりの意見や考えを本気になって説明する姿。
 - ・【算数科】身の回りからこだわりをもって素材を見付け、問題解決の過程について表現したり、必要感に応じて仲間と考えを交流したりする姿。
 - ・【音楽科】ゲストティーチャーや身近な仲間から自分にとってのモデルを見付け、そのモデルに近付きたいとよりよい表現を追究する姿。
 - ・【図画工作科】自分に必要なタイミングでの対話や鑑賞を通して想像を広げ、自分なりの物語を紡ぎ表現する姿。
 - ・【外国語活動】自分の興味やペースに応じて使いたい表現や取り組みたい方法を選び、モデルや I C T 機器の音声を活用しながら表現の幅を広げ、夢中になって互いに考えや気落ちを伝え合う姿。

このように、一人一人が自らの経験や興味・関心、学びやすさに応じて、教材、教具、観点や価値、素材や対象、調べる内容、表現方法などを選択・決定し、問題解決に没頭する姿が見られた。

2) 一人一人が自ら立てた問いの解決に向けて探究できる問題解決過程を取り入れ、単元を展開したことにより、切実感をもって探究していく姿が見られた。例えば、次のような姿である。

- ・【国語科】読み取っていく教材文や書き進めていく文種など、学び進めるための道筋を選び、解釈や表現を交流することを通して、必然性をもって自らの学びに立ち返り、自分の解釈や表現を捉え直す姿。
- ・【算数科】日常の事象から見付けた算数の問題を自分で選択し、集団内で誰とどのように学ぶかを自分で決め、試行錯誤しながら解き進める姿。
- ・【理科】単元で学んだことを活用する場面で、自分の立てた仮説について知識と体験を結び付け、目の前の現象について必死になって解き明かそうとする姿。
- ・【生活科】ゴールの達成に向けて自分が選んだ方法で対象と繰り返し関わることで、工夫を凝らしたり必然性をもって仲間と協働したりするなど、目を輝かせて活動を発展させていく姿。
- ・【体育科】身に付けてきた他種目の動きのこつと現在取り組んでいる動きのこつとを関連付けて考え、自分たちで見いだしたこつの共通点に手応えをもちながら活用する姿。
- ・【総合】自分たちの思いと現実の間に生じる壁に立ち向かい、思いの実現のために試行錯誤しながら粘り強く探究し、やり遂げる姿。

このように、自ら立てた問いの解決に向けて、切実感をもって探究していく姿が見られた

②必然性を伴った学びの見つめ直しを促すしかけ

思考や表現を可視化し、そのずれや隔たりについて吟味・検討する協働的な省察の場面を位置付けたことにより、必然性をもって自らの学びを見つめ直し、思考を深めたり表現を豊かにしたりする姿が見られた。例えば、次のような姿である。

- ・【国語科】問題意識や活動の特性に応じたミニ・レッスンをきっかけに、必然性をもって本文に立ち戻り何度も読み返す姿やよりよい文章を執筆するための拠りどころを得る姿。
- ・【社会科】選んだ観点や立場が異なる仲間との情報交換をきっかけに、仲間の考えと関連付け自分の考えを補強する姿や自分にはなかった新たな視点を取り入れる姿。
- ・【生活科】活動の写真に書き込まれた評価や思いを見合うことをきっかけに、互いの活動をよりよくするためにどうしたらよいか知恵を出し合い、試行錯誤する姿。
- ・【体育科】手本の動画や実際の仲間の動きと撮影した自分の動きを比較することをきっかけに、自分の動きの改善点を探したり、友達のよい動きを見て、そのこつを発見したりする姿。
- ・【総合】互いの考え方や感じ方にはずれや隔たりがあることへの気づきをきっかけに、仲間からの評価を踏まえて自分の考えを見つめ直し、「人それぞれがもつ個性・価値観」や「働くこと」についての概念を更新する姿。
- ・【特別活動】1人1台端末を活用して可視化された互いの考えを共有することをきっかけに、提案理由や話合いの視点に立ち戻りながら話し合い、よりよい合意形成を図る姿。

このように、可視化された思考や表現を比較することをきっかけに、必然性をもって自らの学びを見つめ直し、思考を深めたり表現を豊かにしたりする姿が見られた。

課題

問題解決に没頭し、自律的に学ぶ場面を広げるための授業デザイン

3年次の実践・研究を通して、自ら立てた問いの解決に向けて、熱意をもって探究していく姿、また、必然性をもって自らの学びを見つめ直し、思考を深めたり表現を豊かにしたりする姿が見られた。しかし、**問題解決に没頭し、自律的に学ぶ場面を広げることが、更なる授業改善に向けた課題**として浮かび上がった。そのためには、学びに没頭する子どもの姿の実現につながる授業デザインの在り方について探っていく必要がある。目の前の子ども一人一人の学びに寄り添うために、指導者は絶えず自らの教育観を更新し続けなければならないことが見えてきた。こうした課題を踏まえ、今後の実践・研究では、事前の構想から事後の省察に至る授業デザインの要点を明らかにする必要がある。

3 子どもたちの現状と教育の今日的動向を踏まえて

(1) 学びがいや喜びを感じ、もっているよさを発揮する豊かな学びの実現

前研究では、よりよい問題解決のために探究的に学び進めることが課題となった。

子どもたちが学びがいや喜びを感じ、もっているよさを発揮する豊かな学びを実現するためには、主体性を高めていく必要がある。そのためにも、子ども一人一人が自らの経験や興味・関心、学びやすさに応じて選択・決定し取り組む活動や必要感をもって仲間と協働し問題解決する活動を積み重ねていく授業が必要である。

こうした本校の子どもたちの現状を踏まえると、学習者である子ども自身が積極的に学習過程に関わることを通して自律的に学び進めていく力を高める授業づくりを追究する必要がある。

(2) 中央教育審議会答申や論点整理で求められる学びの実現

令和3年1月の中央教育審議会答申では、実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿として、「全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が（中略）子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの『指導の個別化』が必要である。」、「子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する『学習の個性化』も必要である。」として、「指導の個別化」及び「学習の個性化」の重要性が示された。

また、令和6年9月の論点整理において、「子供が興味・関心や能力・特性等に応じて自ら教材・方法・ペース等を選択できる学習環境を教師が適切にデザインすることなど、学習者が主体的に学ぶ中で自ら学習を調整しつつ資質・能力を身につけることの重要性やその中で教師が発揮すべき指導性について、具体的に議論し、位置付けを検討すべき。」とある。

これらのことから、子ども一人一人が自らの経験や興味・関心、学びやすさに応じて、教材、教具、観点や価値、素材や対象、調べる内容、表現方法、問題解決過程などを選択・決定し、自らの学習の状況を把握しながら主体的に学習を調整することができるように、授業をデザインしていくことが必要である。

(3) 県内外の公立学校が直面している教育課題への対応

令和6年10月及び12月に開催した本校公開研究協議会Ⅰ・Ⅱに参加した方から、次のような声がアンケートで寄せられた。

- ・子どもが自律して学ぶための学習活動や方法について役立った。
- ・「自律した学習者を育てる」という目指す子どもの姿に向かって、1年ごとに成果と課題を積み重ねたことを活かした授業であった。
- ・自律した学習者を育てるための教師の役割について役立った。
- ・子どもに任せる場面を見極めていくことが必要であると感じた。
- ・自律した学習者を育てるために必要な方向性が見えてきた。
- ・研究の方向性についての説明がとても分かりやすく、自分が悩んでいたことを言語化してくださったおかげで、進むべき道が分かったような気がします。
- ・「自律した学習者」は、これからの時代を生きる子どもたちにとって必要な姿が多く含まれていると思います。ぜひ、様々な形で発信していただけるとありがたい。
- ・「自律した学習者」という言葉にとっても惹かれました。私自身も同じことを考えて、教員をしていたからだと思います。ぜひ続けていただいて、さまざまな視点での取り組みについて教えていただけたら幸いです。
- ・「教師の仕掛け」をもっと明らかにして行なっていただきたいと思います。

本校の前研究での取組が、参会者が直面している教育課題への対応を考える上での一助となったという意見が多数寄せられた。その一方で、自律的に学ぶ子どもの姿の具体やその姿を支える教師のしかけについてさらに明らかにし、発信してほしいという意見があった。このことから、附属学校である本校の使命として、自律的に学ぶ子どもの姿の具体とそれを支える授業デザインを明らかにしていくことが求められている。

Ⅱ 研究主題について

Iで述べた理由から、研究主題を次のように設定する。

研究主題 **自律した学習者が育つ授業デザイン**

自律した学習者が育つ授業デザインとは

本実践・研究を通して育成を目指す「自律した学習者」とは、目標に対する学びの手応えをもとに、自ら学びの質を高め、学び進めていくことのできる学習者である。具体的には、自分自身の学びを省察し、自ら設定した目標に向け必要な学習内容や方法を決定し、学び続けていく学習者である。

自律した学習者となるためには、自らの現状を深く分析し目標を設定する力、多様な学習方法を身に付け、状況に応じて適切なものを選択し用いる力、そして目標に照らして達成状況を吟味し学習をよりよいものへと修正していく力が必要となる。こうした学ぶ力を高めることで、自ら学びの質を高めるために積極的に学習過程に関わろうとする主体的な学びが可能になるものと考ええる。

また、「授業デザイン」とは、授業のすべての局面（授業の構想・展開・省察）に見いだされる教師の教育的営みである（鹿毛、2019、pp.1-8）。

- ①授業の構想：構成要素をもとに授業を描き出すこと
- ②授業の展開：構想を踏まえ、「しかけ」を駆使しながら働きかけたり、直感的・即興的に対応したりすること
- ③授業の省察：気づきを得て、その後の実践に活かすこと
単元の意味、価値付けをすること

事前の構想から事後の省察に至る授業デザインの要点を明らかにすることで、前述した「自律した学習者」が育つことにつながると考える。

Ⅲ 実践・研究の目的

自律的に学ぶ子どもの姿の具体とそれを支える授業デザインの要点を明らかにする

前研究で、各教科等における「自律した学習者」がどのような姿であるか明らかになってきた。さらに、子どもの学びに寄り添い教科等の見地から豊かに見取り、自律的に学ぶ姿として意味付けていくことを積み重ねていく。そこで、本実践・研究では、目の前の子どもが学ぶ喜びを感じ、よさを発揮して学ぶことにつなげるために、授業デザインの具体化に取り組む。このことを通して、自律的に学ぶ子どもの姿を引き出すことを支える授業デザインの要点についての仮説を生成していく。

Ⅳ 2年次の実践・研究の概要

子ども一人一人が問題解決に没頭し、自身の可能性を広げていけるような、その子にとって意味のある変容があらわれるように、2年次の実践・研究の重点を次のように設定した。

重点 子どものドラマと教材のドラマを紡ぐ

子どもの学びは、それぞれにとって意味のあるものであるべきである。「筆算の仕方が分かる」「跳び箱を跳ぶことができる」のような、教科のねらい達成はもちろんだが、その学びが、その子にとっての処方箋のようなものになることを目指したい。前年度は問題解決に没頭する姿を重点的に見取ってきたが、その姿は教師の働きかけだけでなく、本人の人となり、学びの履歴など、様々な要因が絡み合うことで現れるのだと実感した。現れた没頭は、次への新たな可能性を生み出す要因となり、豊かな学びとなって自身の人生にまで影響を与え始める。だとすれば、没頭しながら学び進めていくことで生まれる価値や可能性のある変容は、その子にとってのドラマと言えよう。その子にとって意味のある変容をねがい、一人一人が主役の子どもの学びにあるドラマを追っていく。

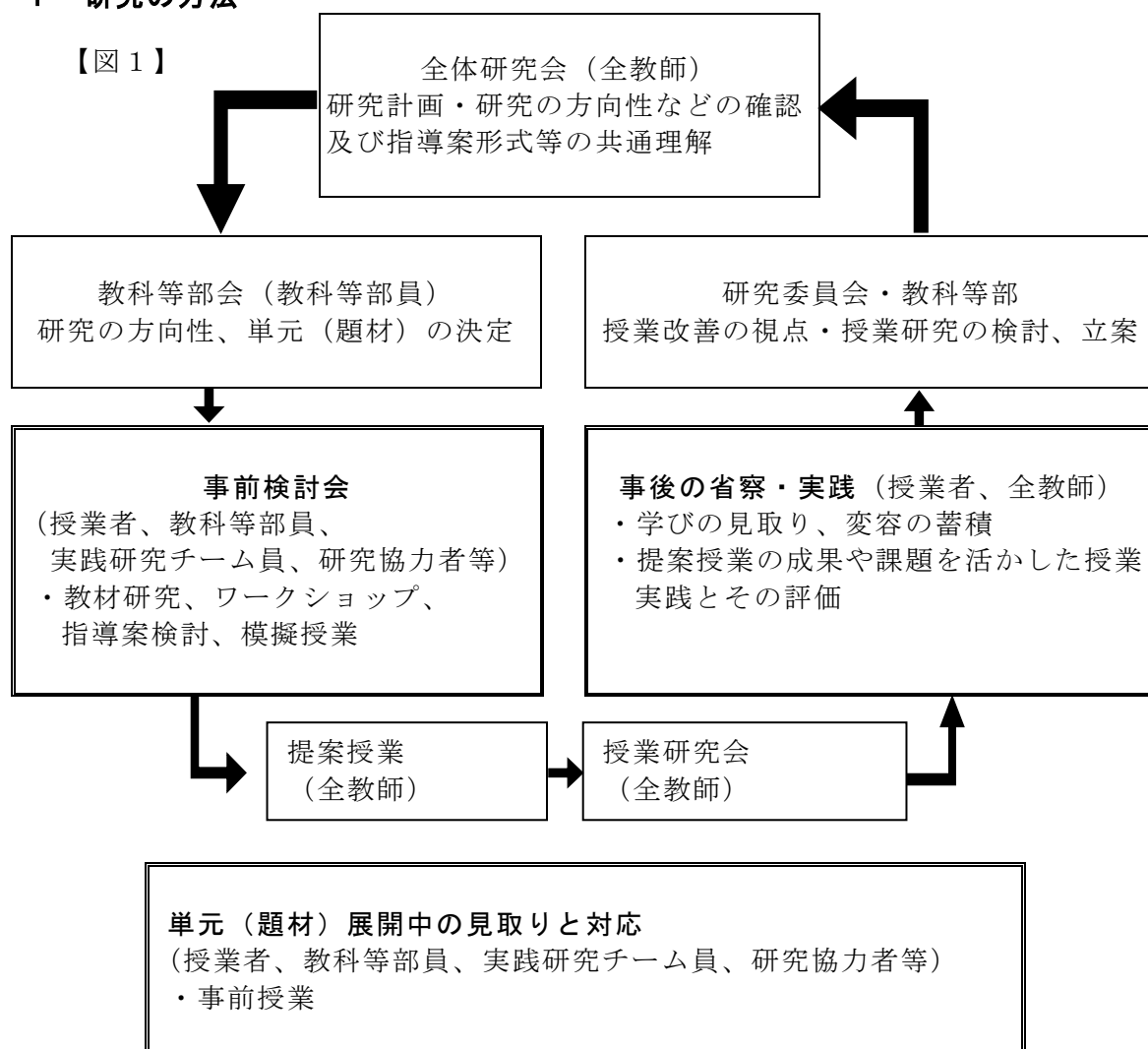
子どものドラマとも言える変容が生まれるきっかけには多様な要素が存在するが、それらを細かく分析して単元や題材の開発を行うことが必要である。前研究の「学びのもののさし」の要素であった教材内容、教科内容の分析をし、学習材にある価値を見いだしていく。そして、子どもの可能性が広がるように、しかけを構想したり展開中に対応したりする。展開中にも子どもと一緒に学びを作っていくことを踏まえると、子どもの変容に伴って形作られていく教材にもドラマがあると言えよう。教師が行う授業デザインとは、想定したり見取ったりする子どもの学びにあるドラマと、教材研究する中で見えてくる教材のドラマとを、うまく織り成し紡いでいくことに他ならない。

そこで2年次は、ドラマと題して、子どもの変容と要因を追っていくことに焦点を当て、各教科等部で重点化し、実践・研究を進めていく。その子にとって価値や可能性のある変容を生み出す授業デザインについての要点を明らかにすることを目指し、2年次の実践・研究に臨む。

V 研究推進デザイン

1 研究の方法

【図 1】



本研究は、子ども一人一人に自律的に学び進める力を育むことを目指している。そして、自律的な学習を促す教師の支援の在り方を探究することを通して授業改善へと結び付けていくものである。

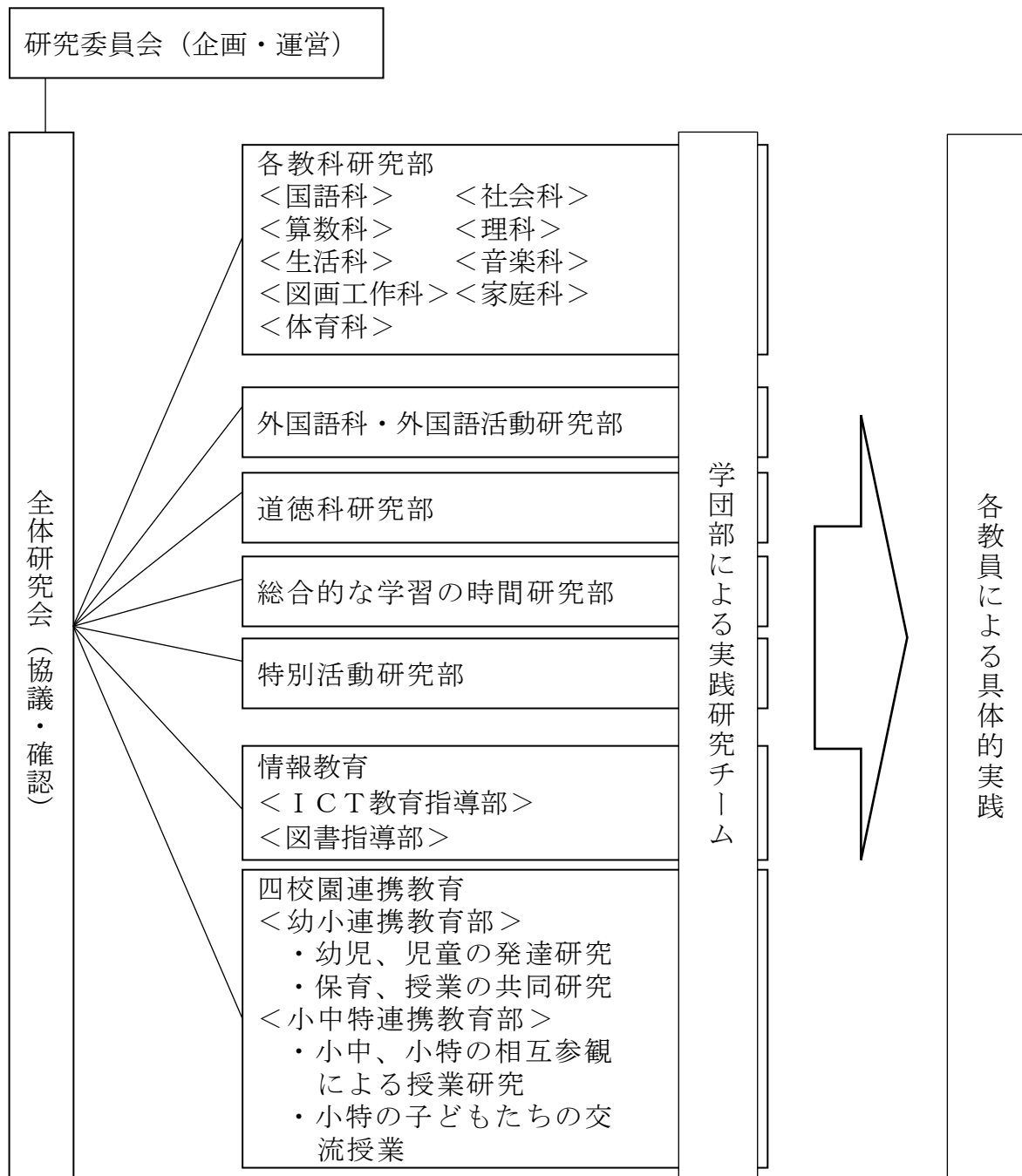
そこで、日常の授業実践における子どもの学びの姿を継続的に見取り、それを蓄積して子どもの変容を総合的に分析する。学びの姿の見取りは、子どもの発言や学習過程で表現したもの、学習中の動きや表情の観察など様々な方法で行う。こうして見取った姿を基に、その姿につながった背景や要因を考察し、俯瞰的な視点で分析を進めることで、自律的に学び進める力を高める授業デザインの在り方を明らかにしていく。

教師が学習者目線に立ち、子どもの学びに意味付けをしていくことで、一人一人の子どもの学びのストーリーが鮮明に見えてくる。そのことが、教師自身が捉えていた子どもや教材への解釈の枠組みを自覚することにもつながり、教師の指導観や授業観が更新されていく一助にもなると考えられる。

図1は、本校の授業研究の1サイクルを表している。本実践・研究で明らかにすることを目指す授業デザインは、授業の構想・展開・省察のすべての局面で見いだされる。そのため、提案授業や授業研究会と同様に、事前のワークショップや模擬授業、事前授業、展開中の学びの見取りと対応について、教師集団が共に意見交換をする場を重視する。また、提案授業で明らかになったことを活かし、事後の省察・実践を重ねていく。このサイクルを継続することで、子どもの学びを多角的に見取り、子ども一人一人の学びを豊かにするための授業力を共に高めていくことができると考える。

そうして創造された子どもの学びのストーリーを豊かに捉え、子どもたちを信じて共に学びを構築することを意識して研究を進めていきたい。（文責：柴田省吾）

2 研究組織



研究組織の目的

- 研究主題の具体化に向けた実践の充実
 - ・学部教員との共同研究の推進
 - ・実践研究チームでの教材研究と子どもの見取り
- 実践の発信
 - ・実践研究チーム、各教員による実践の集積
 - ・公開研究協議会、オープン研修会、校内研修会での実践提案

3 研究・研修計画

	指導研究 他	各教科等研究・授業研究	
1 学 期	○指導部会 ○指導実践・研究計画作成 ○研究の推進 ○幼小連携教育部会 ・ 幼児、児童の発達研究 ・ 保育、授業の共同研究 ○小中特連携教育部会 ・ 小特の交流授業 ○自己評価（1学期）	○第1回全体研究会（4/3） ○各教科等部会 ○学部との共同研究確認 ○第2回全体研究会（4/27） ○第3回全体研究会（5/7・8） ○第1回校内研修会（5/15） ○オープン研修会（6/3） ○附属中学校公開研究会（6/5） ○第4回全体研究会（6/15） ○部内研の実施（6月～7月） ○第5回全体研究会（7/8）	令和八年度
2 学 期	○指導部会 ○研究の推進 ○幼小連携教育部会 ・ 幼児、児童の発達研究 ・ 保育、授業の共同研究 ○小中特連携教育部会 ・ 小特の交流授業 ○自己評価（2学期）	○学部との共同研究推進 ○公開研事前打合せ会（8/18） ○第6回全体研究会（8/19） 公開研究協議会Ⅰ（9/18） 各教科等の提案授業及び協議会・講演 ○第7回全体研究会（10/19） ○第8回全体研究会（11/4） 公開研究協議会Ⅱ（11/20） 各教科等の提案授業及び協議会・講演 ○R9前期研究に向けて（成果と課題）	後期研究
3 学 期	○指導部会 ○研究の推進 ○幼小連携教育部会 ・ 幼児、児童の発達研究 ・ 保育、授業の共同研究 ○自己評価（3学期） ○研究のまとめ（成果と課題）	○第9回全体研究会（1/20） ○第2回校内研修会（2/5） ○第10回全体研究会（2/24） ○学部との共同研究推進 ○R9各教科等実践・研究計画の作成 ○R9年間指導計画、資質・能力表の作成 ○研究のまとめの発行	令和九年度 前期研究

〈参考文献〉

- ・石井英真 2015 年『今求められる学力と学びとはーコンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影』日本標準
- ・白井俊 2020 年「OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来ーエージェンシー、資質・能力とカリキュラム」ミネルヴァ書房
- ・中央教育審議会 2021 年「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）
- ・今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会 2024 年「論点整理」
- ・奈須正裕 2021 年「個別最適な学びと協働的な学び」東洋館出版
- ・奈須正裕、伏木久始編著 2023 年「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実を目指して」北大路書房
- ・河村茂雄 2022 年「開かれた協働と学びが加速する教室」図書文化
- ・鈴木秀幸 2021 年「これだけはおさえない学習評価入門『深い学び』をどう評価するか」図書文化
- ・石井英真、鈴木秀幸編著 2021 年「ヤマ場をおさえる学習評価 小学校」図書文化
- ・学び続ける教育者のための協会編著 2019 年「リフレクション入門」学文社
- ・ネットワーク編集委員会 2019 年「授業づくりネットワーク No. 31 リフレクション大全」学事出版
- ・ネットワーク編集委員会 2023 年「授業づくりネットワーク No. 43 子どもが主役の学習評価」学事出版
- ・ネットワーク編集委員会 2023 年「授業づくりネットワーク No. 44 教室の中の多様性とファシリテーション」学事出版
- ・ネットワーク編集委員会 2023 年「授業づくりネットワーク No. 45 個別最適な学びと協働的な学び」学事出版
- ・ネットワーク編集委員会 2024 年「授業づくりネットワーク No. 47 揃わない前提の授業とクラス」学事出版
- ・鹿毛雅治 2008 年「子どもの姿に学ぶ教師ー『学ぶ意欲』と『教育的瞬間』」教育出版
- ・鹿毛雅治、藤本和久編著 2017 年「授業研究を創るー教師が学びあう学校を実現するために」教育出版
- ・鹿毛雅治 2019 年「授業という営みー子どもとともに『主体的に学ぶ場』を創る」教育出版